

1 出典…『今物語』の一節／東京大学・83年

現代語訳……大納言であつた人が、小侍従と申し上げた歌人（の許）へ通つていらつしやつた。ある夜、情を交して、夜明け前にお歸りになるときに、（大納言は）女（「小侍従」）の家の門から（牛車を）進め出しなされたが、ふと振り返つたところ、この女（「小侍従」）が、名残惜しく思つてゐるのではないかと思われて、車寄せの簾に（彼女の姿が）透けて（見え、一人残つてゐたことが、気にかかつて思えたので、（大納言は）お供であつた（「お供としてついていた」）蔵人に、「（彼女が）まだ（内へ）入つてしまわないで（私を）見送つてゐるのが、見捨てがたいので、何でもよい、（何か彼女に）言つて来なさい」とおっしゃつたので、（蔵人は）「たいへんな大事（「大役」）だなあ」と思うけれど、（無駄に）時を過してよいことでもないもので、すぐに（小侍従の家に）走りこんだ。車寄せの縁の側にきちんと座つて、「（何か）申し上げると（の仰せ）でございます」と（まだ）は、ためらいもなく言い出したけれど、何と（も）言うのにふさわしい言葉も思えない（「思いつかないでいた」ところ、ちょうどそのとき、鶏が、声をそろえて「続けさまに」鳴き出してゐたので、（小侍従がかつて）「あかぬ別れの（「名残惜しい別れの）」と（いう歌を）言つたことが、ふと自然と思ひ出されたので、

ものかはと……（愛しい人を待つてゐる夜に、夜が更けてゆくことを告げる鐘の音を聞くと、名残尽きない別れを告げる朝の鳥の鳴き声は）物の数に入るでしょうか（いや、とにかくも会えたのだから、会えないでゐる夜の鐘の音のせつなさにくらべれば別れの鳥の鳴き声など物の数ではありません）とあなたが言つたという（朝を告げる）鳥の鳴き声が、今日に限つてどうして（こんなに）悲しい（「悲しく聞える」）のでしょうか

とだけ（小侍従に）言いかけて（「歌を詠み伝えて」、そのまま（大納言の牛車に）走りついて、車の後ろに乗つた。（大納言の）家に歸つて、中門に降りた後に、「それにしても、（小侍従に）何と言つたのか」と（大納言が蔵人に）お尋ねになつたので、（蔵人が）「このようなこと（「ものかはと」の歌）です」と申し上げたところ、（大納言は）とても感心なされた。「そうであるからこそ、（お前を）使いの者として（彼女のところへ行くように）はからつたのだ」と（おっしゃつ）て、感動のあまりに、所領地などを（蔵人への褒美として）お与えになつたということだ。

《解答例》

- ① 彼女がまだ家の中へ入ってしまったので、私を見送っているのが見捨てがたいので、何でもよい、彼女に何か言つて来なさい。
- ② 物の数ではないと以前あなたが歌で詠んだという鳥の鳴き声が、今朝に限つてどうしてこんなに悲しく聞えるのだろうか。
- ③ 大納言は、褒美として蔵人に所領地などをお与えになったということだ。

《解説》

① 単語レベルのポイントは「入りやる」「ふりすつ」「何とまれ」であろう。「入りやる」は「入る」の後に「遣る」の接続した形だが、「遣る」は動詞の連用形の後に接続して、打消表現を伴う（「やらす」など）の場合、「（思い切つて）その動作をしておおせる・（完全に）しきる」という意味になる。この場合は打消を意味する接続助詞「で」（テキスト103頁参照）が接続しているので、「（思い切つて）入りきる」（完全に）入ってしまう」の意。「ふりすつ」は「置き去りにする・見捨てる」などの意。「何とまれ」は「何ともあれ」が縮まった形で、「あれ」は命令形で放任を表す用法（テキスト16頁脚注7参照）。「何でもよい」という意味である。また、「見送らる」の「たる」は連用形に接続しているので「存続・完了」の助動詞。この場合はもちろん「存続」。

設問部分は、カギカッコで括られた会話文だが、後に「のたまひければ」と尊敬表現があること（この問題文において、作者は大納言のみ敬意を払い、蔵人や小侍従には特別に敬意を払っていない）から考えても大納言の会話文。前文の内容から、大納言が小侍従の許から帰る際に振り返ったところ、女（小侍従）が名残惜しい様子で一人でいる姿を車寄せの簾越しに見て、お供の蔵人に言った会話文であることを前提に考えると、「いまだ入りやらで見送りたる」の主語は女（小侍従）。「見送る」という動作には主語のみならず意味上目的語が必要である（テキスト131頁「2 動詞の意味」の項を参照）が、いうまでもなく目的語は大納言（の帰って行く姿）。この文節の「が」は、直後の述語文節が「ふりすてがたきに」なので、「見捨てがたい」対象を示す格助詞と考えるのが妥当（テキスト86頁「I 構文の把握」1 格助詞・接続助詞」の項および92頁参照）だろう。したがって「彼女（小侍従）がまだ家の中へ（完全に）入りきらないで、私を見送っていることが」というのがこの部分の基本的な意味になる。次の文節「ふりすてがたきに」の「に」は、連体形に接続していることから「断定の助動詞」「格助詞」「接続助詞」の三つの可能性が考えられるが、「である」と訳すと前後と意味が繋がらないので格助詞か接続助詞

である。先程の「が」同様、続く述語文節との関係で考える。続く述語文節は「言ひて来（言つて来なさい）」なので、「ふりすてがたき」という連体形を準体言と考えると意味がうまくつながらない。接続助詞で「ので」とするとうまくつながることがわかるだろう。

② 文中に歌が出てきたときは、「誰が詠んでいるのか」「誰かに贈る歌ならば、誰に贈る歌か」「どういう状況（経緯）で詠まれたのか」の三点を確認してから歌自体を検討するのが基本的な手続き。この場合は大納言に命じられた藏人が、小侍従に大納言の言葉として伝えた歌（つまり代作）であるが、特に注意すべきは歌の直前が「思ひ出でられければ」と、「已然形＋ば」の順接の確定条件になっていること。思ひ出したのは小侍従がかつて詠んだ歌であり、その直後に代作の歌「ものかはと君が言ひけむ」があることを考えれば、ここの「已然形＋ば」は「原因・理由」の用法である。したがって、この歌の内容を考える際には、藏人が思ひ出した小侍従の歌の内容も念頭においておく必要がある。もちろん設問部分の歌の上の句「ものかはと君が言ひけむ鳥のね」というのは、注にある小侍従の詠んだ歌を踏まえている。だから、「言ひけむ」の「けむ」は連体修飾語になっているが、「過去の伝聞」の意味で捉えるのがよいだろう（テキスト47頁③時（時制）に関する推量」の項を参照）。ちなみに小侍従の歌「待つ宵に……」は「なかなか来てくれない」恋人を待つ夜の鐘の音の切なさにくらべれば、（別れを告げる）鳥の声など物の数ではない——「ものかは」は「もの」＋「かは」で反語（テキスト108頁①「や」「か」について）の項を参照——ぐらいの意味。

下の句の「けさしもなどかなしかるらむ」では、「しも」「などか」「らむ」がポイント。「しも」は強意の副助詞で（テキスト81頁参照）、とりあえずうまい訳語が見つからなければ意味上無視してもかまわないが、「けさ（今朝）」を強調していて、「（他のどの時でもなく特に）今朝」と言っているわけだから、「（特に）今朝に限って」ぐらいに訳せるとさらによい。「などか」の「など」は疑問の副詞、「か」はいうまでもなく係助詞。これらの疑問語と呼応して「らむ」があるので、「らむ」は「現在の原因推量」の意味でとらえるのがよい（テキスト47頁③時（時制）に関する推量」の項を参照）。

③ 語としては「しる所」の「しる」、「たびたりける」の「たぶ」がポイント。「しる」は現代語の「知る」と同じ場合も多いが、「統治する」「（領地を）治める」という意味もある。——同様に「しろしめす」も「知る」の尊敬語であるが、「お治めになる」という意味のこともあるので注意——。「たぶ」は尊敬語「たまふ」が縮まったものと理解しておけばよい。「たぶ（たまふ）」は本動詞なので、「お与えになる」「くださる」などの意味（テキスト126頁参照）。①の解説でも触れたように、「しる所などたびたるける」は、尊敬語があるので大納言

が主語と考えてよい。したがって、「しる所」は大納言が「しる」場所であり、それを「お与えになる」のだから、「治めている場所をお与えになる」と考えるのが妥当。

「たりける」は「存続の助動詞」＋「過去（伝聞過去）の助動詞」の形だが、この話の時点で領地を与えたはずなので、「うていた」と訳すとこの場合不自然になる。こういう場合は素直に「うた」としておけばよい。最後の「となむ」は係り結びの結びの省略の形。「うと＋係助詞」の形で結びが省略されている場合、伝聞内容を示し（テキスト112頁）⑤ 結びの省略」の項を参照）、「うということだ」ぐらいの意味。なお、直前の「たびたりける」の「ける」も「伝聞過去」の助動詞である。設問部の意味（直訳）は「治めている場所をお与えになったということだ」。これに必要な語句を補って解答を作成する。主語は大納言であったが、「お与えになる」には相手（対象）が必要。文脈を見ると、この部分は「『さればこそ、つかひにははからひつれ』とて、感のあまりに」の直後で、ここの会話文は、「とて」で続いている点やその内容から大納言が小侍従の許に遣わした藏人に言ったものと考えられる。「さればこそ」の「さ」の指示する内容は藏人が「かくこそ」と申し上げたことで、それについて「いみじくめでたがられけり」（尊敬の助動詞「らる」があることから主語は大納言）とあり、これが「感のあまり」と文脈上同じことを意味するので、文句なく藏人に領地をお与えになった、ととらえるのが妥当。さらに、領地を与えた理由が、藏人が大納言の期待通り上手い歌を小侍従に送ったことなので、解答に「褒美として」などという要素を加えればもつとよい。

現代語訳……「(父上が) 御在世のころ、(この私を) 人よりも特に立派な様子(「誰よりも出世すること」を(させてやろう)とお考え置きくだされたのに、この身の宿運がつたなくございましたので、今はこのようにして(「無実の罪を着せられて」都を離れて知らない世界に配流されて、また(再び) このように亡き(父上の) 御霊が御覧になる(「父上の御霊前にお目にかかる」こともございますまい。自分自身(として) は過失があると思いますこともございませうが、そうであるはずの自分自身の罪(「前世からの因縁」で、このように情けない目にありましたので、なんとか(このまま) 邸へも帰らず、今夜のうちに身を隠すことをしたいものです。亡き(父上の) 御霊前に(とつて) も御名譽に傷をつけた(「父上の名譽をも傷つけた」と、後世に汚名を残します(こと) は、本当に悲しいことです。(どうかこの私を) 御加護ください。(弟の) 中納言も(私と) 同じように(罪を問われて、朝廷は中納言を) 配流することになりましたが、(配流される先は、私と) 同じ方角でさえありません、(私たち兄弟が) 別々に分かれてしまいます(こと) は、悲しいことです。また、忌まわしい(我が) 身はそれとして、(妹の) 宮の御前がこの数ヶ月普通でもいらつしやらない(「懐妊している」のに、このような大変なこと(「伊周・隆家の配流」におあいになって、まったく御湯をさえ召しあがらず、涙に沈んでいらつしやるのを、(私は) たいそう忌まわしく畏れ多く(感じて) ございます。(宮の御前の) いらつしやる陣屋の前は、せめて笠をだけでも脱いで通る(もので) ございますのに、あのような何とも言いようがない(下賤な) 者どもが、(宮の御前が) いらつしやる(御座所の) まわりにひしめいて、御簾を引きちぎりなどして、たとえ(宮の御前は) あきれ果てるほどにもつたいなく悲しい状態(「下賤な者に言語道断な不埒を行なわれている状態」でいらつしやるとしても、もし運よく御無事でいらつしやったら、御出産の折はどのようなさるので御座いますし。頼りにならない(私の) 身さえも将来どうなるかわからなくなつてしまいましたので、やはり(父上は) この(宮の御前の) 御身を離れ申し上げなさらず、御無事で(いらつしやるように) と(宮の御前を) 守り申し上げなさつて、またもつたいなくも畏れ多い帝(「一条天皇) のお気持ち(の中) にも、また女院の御夢(の中) などにも(姿を現しなさつて、このこと(「私が配流されるに至つた今回の事件」は(私に) 罪がないはずのこと(「お咎めがないのが当然の処置だということ」と(帝や女院に) 思わせ申し上げなさつてください」などと、泣きながら(父隆家の霊前に) 申し上げなさつているままに、(伊周は) 涙に浸つていらつしやる。

《解答例》

ア 父上は生前、この私を他の人よりも立派な様子にしようとお考え置きくださったのに、
イ 私自身は自分に過失があると思いますこともございませんけれど、
ウ 宮の御前はまったく御湯をさえ召しあがらず、
エ 宮の御前が、あきれ果てるほどにもつたいたなく悲しい状態でいらっしやる
オ 今回の事件は私に罪がないはずのことと、帝や女院に思わせ申し上げてください。

《解説》

ア 単語としては「けに」「めでたし」「おほしおきつ」が重要。「けに」は他の事物より目立つ様子を意味する形容動詞「異(け)なり」と同根の副詞で、「いっそう・ますます・格別に」などの意味。「めでたし」は基本中の基本古語で、「素晴らしい・優れている・立派だ」などの意味。「おほしおきつ」は「思ひ掟つ」の「思ふ」が尊敬語「思す」になったもの。「思ひ掟つ」は「(あらかじめ方針を) 思い定めておく・(心に) 決めておく」などの意味。ちなみに「おほしおきてさせ給ひしかど」の文節を「おほしおき／で／させ／給ひ／しか／ど」と品詞分解することはできない。「て」で一単語である場合、単純接続の接続助詞の可能性と完了の助動詞「つ」の未然形・連用形の可能性があるが、いずれも文法的に辻褄が合わない。助詞の後に「さす」という助動詞が接続することはない(テキスト11頁「Ⅳ 文節」の項参照)し、助動詞「つ」の次に「す」「さす」「しむ」が接続することもない(テキスト31頁「参考」の条を参照)。

設問部分は、途中に格助詞「と」があつて、「おほしおきつ(思ひ掟つ)」で受けている点に注目すると、「『人よりけにめでたき有様を』とおほしおきてさせ給ひ……」という形になっている(テキスト101頁「と」の項を参照)ことがわかる。そこでまず問題は「おほしおきてさせ給ひしかど」の主語であるが、リード文の内容から、この(というより本文のほとんどを占める)部分の会話の主が伊周であることは明白なので、その中で出てくる尊敬表現の主語が伊周である可能性はまずない。設問部分の直前が「おはしましし折」で、「あり」の尊敬語「おはします」＋過去(直接体験)の助動詞「き」の連体形(テキスト119～120頁の「敬語動詞一覧表」および35頁「1時(時制)」に開する助動詞」の項を参照)の形で、「あり」には「生きる」という意味があること、それに本文の前のリード文の内容を考えると、「おほし

おきてさせ給ひしかど」という述語文節の主語は亡き父道隆と考えるのが妥当。したがってここで出てくる助動詞「さす」は、文脈上使役の対象者を必要としないので、尊敬の意味と考えてよいだろう。次は道隆が（存命中に）思い定めていた「人よりけにめでたき有様」とは何かということになるが、「人より」の文節がつながる述語「めでたし」の意味から考えても、「他人より格別に優れた（立派な）様子」というぐらいの意味であることは明白であろう。あとは誰についてのことなのかということになるが、「人よりけにめでたき有様」の部分に尊敬表現がないこと、「おぼしおきてさせ給ひしかど」が、已然形（助動詞「き」の已然形）＋接続助詞「ど」の逆接の形でつながる続きの部分「みづからのゝまかり流されて」云々の内容——自分自身の宿運がたなくて、都から離れたところに配流される——から考えて、会話の主であり、亡くなった道隆の子である伊周についてのことと判断できよう。

イ「思ひ給ふる」の「給ふる」が下二段活用 of 連体形であることが最大のポイント。いうまでもなく謙讓語で、会話の主である伊周が主語である（テキスト126頁参照）。「おこたる」は現代語「怠る」と同じ意味である場合もあるが、他に「罪を犯す・過失をする」や「病気がよくなる」などの意味もある。リード文の内容から、無実の罪を訴えているはずだから、「罪を犯す・過失をする」の意。したがってその前の「みづから」も「私自身」ぐらいの意味。あとは「侍らねど」だが、「侍り」はこの場合本動詞で、謙讓語と丁寧語の可能性がある（テキスト124頁参照）が、主語が人間ではない「思ひ給ふること」である点からも丁寧語。ラ変動詞の未然形に接続し、後に已然形接続の接続助詞「ど」が接続していることを考えれば、ここの「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形である。

ウ「つゆゝ打消」の副詞の呼応（テキスト115頁）、副助詞「だに」（テキスト74頁）、尊敬語「きこしめす」（テキスト120頁）の三つに注意すれば難しくはない。「つゆゝ打消」は「まったく・全然〜ない」と訳し、これとともに用いられているのだから「だに」は「類推」の意味。「最低限」では意味を成さない。「きこしめす」は「聞く」「食ふ・飲む」の尊敬語だが、「御湯だに（御湯さえ）」とあるので「食ふ・飲む」の尊敬語。「まったく御湯をさえ召しあがらず（お飲みにならず）」となる。ちなみに、「訳」の場合はこれでよいが、「説明」を求められた場合は「御湯をさえ召しあがらず、まして他の物などまったく口にお入れにならない」となる。

エ この前後の話題が、会話の主である伊周の妹宮の御前（中宮定子）についてであることを注意。したがって設問部分の直前「おはします陣の前は〜御簾をも引きかなぐりなどして」は、定子の御所で乱暴狼藉を働く「えもいはぬ者ども（下賤な者ども）」の行為を語っている

ことになる。設問部分には「あさまし（驚きあきれる・つまらない、などの意）」「かたじけなし（おそれおおい・もったいない、などの意）」「おはします」といった古語があり、このうち「かたじけなし」は基本的に高貴な立場の人や神などを対象とする形容詞であり、「おはします」は尊敬語である。だから、直前に「引きかたじけなし」と、接続助詞「て」があるからといって、主語が変わらないと考えるべきではない。「かたじけなく」「おはします」のは宮の御前と考えるのが妥当。「悲しくて」の「て」も接続助詞で単純接続を意味し、「ゝの状態」の意味であることに気づけば、それほど苦勞なく訳せるだろう。

オ まず前提は、この部分まで続く伊週の会話文が、リード文にあるように、父道隆の幕前で自分の無実を訴え、一族への加護を願う内容であるはずだということ。したがって最後の部分の命令形「給へ」は、父道隆に加護を願っているはずである。当然「思はせてまつらせ給へ」の主語は道隆。この文節は「思は／せ／たてまつら／せ／給へ」と品詞分解できるが、二語目の「せ」は「思ふ」の未然形に接続し、直後に補助動詞「たてまつる」（謙讓語…テキスト124頁参照）が接続している——つまり尊敬語とくっついていない（テキスト62頁参照）——ことから、使役の助動詞「す」の連用形であると判断できよう。これに対して四語目の「せ」も未然形に接続しているので助動詞「す」なのだが、こちらは直後に尊敬語補助動詞「給ふ」が接続していること、すでに同じ文節に使役の助動詞があることから尊敬の助動詞である。つまりこの文節の訳は「思わせ申し上げなさってください」になる。使役の助動詞があるからには、使役の対象者がいるはずだが、設問部分の直前が「かけまくもかしこき公家（一条帝）の御心地にも」「女院の御夢などにも」と「にも」で並列になっているので、「帝」と「女院」両者が使役の対象者である。あとは「このこと」の具体的意味内容と「咎なかるべき」の意味を考える。「咎」は「罪」を意味する語で、それが「なかるべき」（形容詞「なし」連体形＋助動詞「べし」連体形で、「べし」の基本の意味は「当然」である）とは、「帝や女院に」思わせてください」と父道隆に加護を願っている点からも、自分の無実を訴えているのだと判断できよう。「このこと」とは、いうまでもなく伊周配流の理由となった事件である。